

---

# 少年の物語

時雨奏楽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少年の物語

### 【Nコード】

N6088X

### 【作者名】

時雨奏楽

### 【あらすじ】

昔、ある大国があった。

そこに使える少年はひそかにある人に思いを寄せていた。

しかし、それは叶わぬ恋。

そうと分かっても少年は思いつづけた。

そして、思いを寄せて1年後。

少年の使える大国が戦争を起こしたのだ。

無論、王国に使える少年は戦争の地へ行かねばならない。

そこで少年はずっと隠し持っていた魔術を発動させた。

「イーストハープ・ヴォリック！！！！」

少年はそう言い残し戦争の地へ向かった。

唱えた魔術は一体何を起こすのか。

それは私にもわからない。

## プロローグ

静まった夜の事。

一人の少年が道端に倒れていた。

血まみれで体全体が痙攣けいれんを起こしていた。

シン  
と静まった夜。

どこからか声が聞こえた。

「 我が名は 。 お前を 。 もつす  
く が目覚める 」。 」

そのことばは誰に向かって言ったのかはわからない。

もし、あの少年にその声が聞こえていても血まみれのあの状態じゃとてもじゃないが聞き取れないだろう。

数分後、倒れていた少年が残りの力を振り絞っているのかは分からないが、聞きとれるか取れないかくらいの小さな声で何やらぼそぼそと呟いた。

静まった夜で、誰にも聞こえないように、自分に言い聞かせるようにそつと……………

少したって、少年は呟き終わったのかまたぐったりと地面に倒れた。

そして、そつと……

「お、俺は……まだ、し、死ねない……  
。あいつをつ……守るんだ……  
……いかないんだ!!!」  
終わる訳には……

そう言って、今度は呪文のような言葉を発し、少年は一瞬で灰と化した。

風に吹かれどこかへ飛んでいく。

月はそれを寂しそうに見つめていた。

## プロローグ（後書き）

久々の投稿で少々ガタガタですがこれからも遅くなると思います  
が書いていきますのでよろしくお願いします。

## 音と世界に招かれて

冷えた冬の朝。

道には凍りが張り詰め、空を映しだしていた。

物語はここから始まる。

そしてやがて終わる。

人間の一生と同じように。儂く、悲しく。

風に吹かれて消えて行った少年は、今どこにいるのだろうか。

心地よい風に吹かれているとどこからか音楽が流れてきた。

「あの店からか……。」

何処かで聞いたことのある音楽だった。

その音楽が流れている店に入ってみるが、そこには誰もいなかった。

「なんだろう、この店。」

不思議に思いながら店を出ようとすると、音楽が急に違う曲に変わった。

聞いたことのない音楽のはずなのに心は踊った。

もしかしたら灰と化したあの少年が聞かせてくれているのか。

「まったく・・・どこにいるんだろうか。」

たぶん、少年の心の中の炎はまだ燃え尽きてはいないだろう。

きっとこの流れている音楽も誰かにあてて流しているのだろう。

バキツ

氷を踏んでしまった。さっきまで映し出されていた空にひびが入った。

「バキツ」

この音も自然な音で聞き慣れている。

そう、この世界は音であふれている。

今宵、私はそこへ招かれる。



音と世界に招かれて（後書き）

ごちゃごちゃですねWWW次も遅くなるかもしれない（――…）

## 運命の糸をつなぐ時

“ 未来って何？ ”

私が聞いても、心は答えてくれない。

“ 運命って何？ ”

また、何も言わない。

心がつながる時は本当のかけがえないものを手に入れた時。

灰と化したあの少年もまた、誰かと心でつながっていたのだろうか。

誰かを信じ、誰かを愛し、誰かを失い。

運命には逆らえず、運命のままに生かされる。

生きているということは多分、そう言うことなのだろう。

瀕死の状態になると、運命はその人を生かすかどうか決める。

奇跡が起きる理由は、運命がチャンスを与えるからだ。

人は運命から吊るされた糸を手に入れられるかを争い日々生きている。

そう。その人次第なのだ。

あの時、少年がつぶやいた言葉は言霊となり、彼の運命糸さだめを繋いだのだろうか。

私もいつか、自分の糸が切れる日が来るのだろう。

彼のようにまた繋がれることは無いだろうが。

運命には逆らえない。

しかし、未来には逆らえる。

未来は変えられる。

そう。これからのやり方によって。

糸のつなぎ方によって。

運命の糸をつなぐ時（後書き）

凄く遅れました（ー；ー；）

不思議な心は傳くて

心には「光」というものがある。

それは誰しもが持っている。

「希望」というものか。

しかし、その光に気付くのはごく一部の人間でしかない。

手にしていても気づかないものは多いのだ。

あの少年は心に何を宿し、生きていたのだろうか。

そして、私の心には何が宿っているのだろうか。

心は単純なことでも折れやすい。

心を揺さぶられ、狂わされれば人はまともにはいられない。

そう。だから儂いと言われるのだ。

心に刻み込まれた傷は一生癒えることは無い。

ずっと。

永遠に。<sup>エパー</sup>

人間は、心がとても弱いことを知っている。

だから、人はそれを守りながら、隠しながら生きている。

ミステリアス・ザ・マインド  
不思議な心は儂くて。

心の形は人によって違う。

だから、ミステリー不思議なんだ。

あの少年は、きっと心が折れそうな中も耐え、誰かを守るために生き続けた。

心はいつでも不思議なもの。

その心に振り回される人間もいる。

少年には全てが儂いものであり、そして、全てが不思議だった。

私も見届けよう。

その儂い命を。

## 翔け、少年よ

人は皆、一度は空を飛びたいと思うだろう。

人間は、自分だけでは飛べないから、「飛行機ザ・フラウイング」というものを生み出した。

あの少年は、思っていたのだろうか。空を飛びたいと。

灰と化し、風に吹かれ、実現させたのだろうか。

もう一度生まれ変わったら、少年は大切な人の事も忘れてしまうのだろうか。

最後に大切な人と共に空を飛びたかったのだろうか。

私は鳥が羨ましい。

けれど、鳥の一生はとても短い。

人間よりも、地上の動物よりも。

少年の心は翔けたのだろうか。

私もいつか、大空ウイングを翔いてみたい。

そして、今、少年に届くように叫ぶ。

「さあ！翔けはばた、少年よ！自らを解放し意のままに翔けはばた！」

少年の心に響いたかどうかはわからない。

近くの木に留まっていた鳥たちが大空を翔はばき、遠くへ去って行った。

私は私。

少年は少年。

それぞれの思いによってどう飛ぶかが決まる。

試験に合格し、将来が翔はばけたり。

人それぞれなのだ。

翔はばけた者は素直に生きることができる。

しかし、翔はばけなかったものはいつか後悔する。

少年はこれから生まれ変わっても、きっと素直に、そして明るく、前向きに生きることができらるだろう。

そう。隠れて闇の中を生きているこの私とは違ってな。



## 血に染まれ、儂き恋よ

「お、俺は……まだ、し、死ねない……  
。あいつをつ……守るんだ……  
……いかないんだ!!!」  
終わる訳には……

少年の最後の言葉。

血まみれで、既に死んでいてもおかしくない身体で、誰かのために生きようとした少年。

いくつもの歳を重ね、大切な人と大切な時間を過とぎしてきた。

少年の大切な人は今、戦争から逃れ、何処かに身を潜めているのだろうか。

私はそんなことばかり考えていた。

何故だろう。

私はあの少年について、別に、考えなくてもよいのだ。

少年は恋をしていた。

しかし、その恋は“ロスト・ザ・ヘル戦争”と言う言葉で、一瞬にして消え去った。

儂く、終わってしまった。

少年の国は今や、どうなっているのか。

戦争に勝ち、少年の大切な人も生きていることを私は願う。

生まれ変わっても、記憶が残ることは無いだろう。

いや、少年が戦争に行く前に唱えた呪文。

「イーストハープ・ヴォリック」

これは一体何を意味するのか。

もしかしたら、記憶を操作する呪文かもしれない。

それが本当なら、きっと、どこかで大切な人と会う日が来るだろう。

そのときは、きっと新たな恋が始まるだろう。

さあ、私は次の街へと旅立つか。

少年の事はもう少し様子を見よう。

次に会うときにはきっと、今まで以上に大変なことが待っているだろう。

そう、私は思う。

血に染まれ、傳き恋よ（後書き）

物語があやふやになったなっ  
て思います（――）

## 眠りはいつしか夢の中で

人は必ず1日1回は寝る。

寝ないと次の日までの体力が持たないからだ。

精神的にもきつくなるだろう。

少年の国が戦争を起こした頃。

戦争中はきつと一睡もできなかつただろう。

たとえ、寝る時間があつたとしても、気が休まらない。

何故なら、寝てる間に殺されるかもしれないのだ。

そう。戦争とはそういうものなのだ。

少年が血だらけの理由は、きつと戦争で殺されそうになつたから逃げてきたのだろう。

でも、大切な人を国へ残したまま自分だけ逃げてくるだろうか。

普通、大切な人を残して逃げるおろかな奴はいない。ロスト・リード

もしかして、ここは別世界なのかもしれない。

そう。夢の中とか。ラフカット

そして、次の町に旅立とうとしている私も、少年の夢の中ドリームにいるの  
かもしれない。

いつの間に夢の中ドリームへ来たのだろうか。

その時の記憶は……ない。

誰かに消されたのか。

そういえば、少年と出会う以前の記憶は……。

消された……か。

多分私も愚か者ドブスだということだな。

眠りスリープはいつしか夢の中で。

少年は今静かに生まれ変わるまで眠っているのだろうか。

大切な人の側に行けるように。

願いながら。

我が名は“フル”ゝ不思議な人間と声ゝ（前書き）

2回に分けて更新します。

いつも書き方様々ですみません（・・；）

我が名は“フル”く不思議な人間と声く

少年の心

「我が名は。お前を。もうす  
く。が目覚める。」

「俺の名は……。」

だめだ。どうしても思い出せない。

あの時、姫の事を忘れてなくなって禁術ヴァイオレットの呪文を唱えてしまった。

しかし、やはりまだ未完成だったか……。

姫をかばって負ったこの傷。

きつと、姫の心に刻まれてしまった。

なんてことをしてしまったんだろう……。

声が出せない……。だから、いつも心で話しかけていた。けど、誰も気づいてはくれなかった。

そんな時、姫は俺に話しかけてくれた唯一の人だった。

僕が心で話せるのは姫だけだった。

その姫とも距離があり過ぎて届かない。

お互いの心の痛みを二人で分かち合ってきたのに、肝心な時に分かち合えない。

とりあえず、死ぬわけにはいかなかったから灰と化してみたけれど……。

「あのとき聞こえた言葉……。一体誰だ？俺は姫以外とは話していない。いや、話さない。」

思い出してみると、やはり誰かに声をかけられた気がした。

それを覚えているということはまたつながるかもしれない。

いつもなら忘れてしまうそんな記憶。

だが……。

「俺は、今灰と化してしまった……。繋ぐにもつなげないじゃないか。」

繋ぐためだけに元に戻ったらまたあの古傷が開いてしまう。

繋ぐにもつなげない。

身体に戻ろうにも戻れない。

誰かに伝えようとしても伝わらない。



「駄目じゃないか……。」

どうやら俺は、生き延びる為だけに、殆どの選択肢を失ってしまったようだ。

「どうすればいいのだろうか……。」

とりあえず、風に吹かれて知らない土地にやってきた。

そこで俺はあることに気が付いた。

灰と化しているはずの俺に、手を振っている人間がいたのだ。

「ん……？あの人間、俺の事が見えてる？？」

思わず、手を振り返してしまった。

「とりあえず、話しかけてみるか……。」

(あの……。もしかして俺の事見えてますか?)

灰と化したため、今ではそこら辺に転がっているゴミと同じくらいのカスになっている俺が、今更こんなことを聞くのも何か恥ずかしい。

だが、そんなことを想っている暇なんて無かった。

「……Hey you!! What you name??」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は灰になっていたとしても硬直してしまった。

知らない言葉を話されては対処のしようもない。

俺は諦めてまた風に吹かれた。

「・・・・・・・・ちょ、ちょっと待って!!!!灰の君!」

俺はまた硬直した。やはり見えていたのだ。

(見えてるなら見えてるって言うてくれればいいのだが・・・・・・・・)

「ごめんごめん。君、もしかして・・・・?」

強い風が吹いて良く聞こえなかった。

(ごめん。良く聞こえなかった。もう一回言うてくれる?)

「えっと、君ってウオスレイト王国の兵士だった?」

「・・・・・・・・」

率直に聞かれた。しかし、俺はすぐには答えなかった。

何故なら、相手が何者なのかわからないのに姫のいる王国の事を話す訳にはいかないからだ。

(お前、誰だ???何故、俺の心に声が届く?)

「あ、ごめん。俺の名前は鎖桜城<sup>じょう</sup>。ウォスレイト王国の1軍兵士だ。」

(王国の……1軍兵士!?)

城はエリート<sup>エリート</sup>の称号である紋章を見せた。

「どうだ。これで信じたか? 2軍兵士。1386番、ロウイ・アミュレッタ君。」

まだ、戦争が起こる前。ウォスレイト王国で呼ばれていた番号。

だが、自分の名前だけではどうしても、思い出せなかった。

(す、すみません。1つ下のくせに、無礼なことを……。どうかお許しください!)

素直に謝った。しかし、期待はずれの答えが返ってきた。

「そんなことより1386番。今のお前の状況を説明しろ。」

謝罪をすんなりスルされた。だが、すぐに今の状況を説明しなければならなかったので気にしないことにした。

「……。そう言うことか。しかし、戦争を放棄してのうのと逃げるとは。お前は大変なことをしたんだぞ! 今すぐ王国に戻れ! ……と、言いたい頃なのだが。灰と化した状態じゃ戻ろうにも戻れないな。」

だからと言って、今戻る訳にはいかない。戻ったらあの傷が開いてしまうからだ。

その傷を見られる訳にはいかない。

でも、姫にも会いたい。

それに、自分の名前すらろくに思い出せないなんてへっぴこすぎる。

そんなとき。城の後ろから俺に手招きしている人間がいた。

俺は、こっそりその人間の方へ行った。

何故かそっちに行かなければならないと心が思ったからだ。

それに、手招きしていた人間には何となくが見覚えがあった。

我が名は“フル”く魔術者と王国く

その人間の方に寄ってみると、突然空間にゆがみが生じた。

(な、これは!?)

そう、これはウォスレイト王国で、よくつかわれている魔術。

「魔術についてはまだ覚えているみたいだね。でも、自分の名前だけはどうしても思い出せないようだ。」

俺の事を何か知っているようだった。

「君の心には鍵がかかっているようだ。その鍵さえとければ君の体も名前も声も古傷も元に戻れると思うよ。」

その言葉を聞いた瞬間、俺は相手の肩をつかんでいた。

(どうすれば元に戻れる?何でもするから、頼む!教えてくれ!この通りだ!)

俺は灰と化していることを忘れ、必死に土下座した。

「良からう。我が名は“フル”。お前を救いに来た。もうすぐ神々が目覚める。」

聞いたことのある言葉だった。

そう。灰と化する直前に聞こえたあの言葉。

(まさか、あんたが俺の心に声を……………)

「君の名前は“ロウイ ト・アミュレット”だからな。そうだな・  
・“ロート”。長いから短くした。良いな、ロート。」

(あ、はい。(適当だな……………))

かなりの魔力が感じられた。まだ、感覚は鈍っていないようだ。

そして、俺はフルから王国の事や、姫の事について聞いた。

どうやら、フルが言うには姫は何とか無事なようだ。だが、いつもぼーっとして以前の明るさが無くなったと言っていた。

(俺のせいか……………)

「ま、ロストファイント王国秘密機関探索科本部長のこの俺にかかったらこれくらいは朝飯前だな。」

(な、あのロスファイ本部長!?)

その機関については耳にしたことはあった。

その凄い人を目の前として俺は硬直してしまった。

「そんなに固まらなくても良いんだけど。で、ロートの心の鍵を解くにはもつすぐ目覚める神々に対して祈りを捧げなければならない。たとえ、どんな犠牲が出ようとも。そして、神を絶対に裏切らないこと。それを守るのならきつと、ロートの心の鍵はとかれるであ

るう。」

（分かりました。一生涯その神々に祈りを捧げます。そして、何があっても絶対に裏切りません。）

俺は姫のもとに戻れるならどんな試練でも耐えることを誓った。

「じゃ、その神々がいるところ（凱旋山<sup>ヘルディオール</sup>）に行こうか。」

こうして、俺とフルは凱旋山に行くことになった。

我が名は“フル”く魔術者と王国く（後書き）

やっぱり物語があやふやになってきた感じですか（ー・ー・ー）

この物語の終わりが見えない・・・。。。



人間は弱く、そして未熟

凱旋山ヘルディオールに着いてから数時間がたった。

「ここが祭壇ルラだよ。」

目的地に着いたようだ。

（ここが祭壇ルラか・・・。）

これでやっと姫に逢える。そう思うと心が躍った。

（神々に祈りをささげればいいんだよね??）

俺は最初に確認しておいた。

「ああ、あと、生贄ナマモノもな。」

俺は一瞬嫌な言葉を耳にした。

（生・・・贄・・・?）

どう言うことが解らなかった。何故なら、生贄なんて俺は聞いていない。

（おい、フル。今のはどういうことだ？俺は生贄なんて聞いてないぞ!!説明しろ!!）

「あれ、聞いてなかった?? “たとえ、どんな犠牲が出ようとも”

ってちゃんと言ったんだけど。」

確かにその言葉に聞き覚えはあった。

(言ったとしても“生贄”なんて言葉は聞いていない！)

「今更ごちゃごちゃ言つなよ。普通考えれば“犠牲”生贄”だろ？」

俺は怒りがこみ上げてくるのが解った。

(俺自身のためだけに……犠牲を出すくらいなら……俺は……俺は願いなんで叶えなくていい!!!!!!)

ただ姫に逢いたい。そんな思いだけだった。

「もしかして、僕を裏切る気??駄目だよ、ロート。神を、僕を裏切っちゃ。神々は目覚めるのを楽しみに待ってるんだよ。その期待を裏切るの?」

(裏切る……?俺は契約なんかしてない。裏切るも何も無い!)

「……ロート。君ちゃんとぼくに言ったよね?“何があっても絶対に裏切りません”って。忘れたとは言わせないよ……。」

確かに言った。“何があっても裏切らない”と。でも、これとそれとでは話が別だ。誰が生贄なんて出すもんか。

「その顔は完璧な敵意だね。これだからそういう人間は嫌いなんだよ……」

フルはそういつと俺に向かって攻撃してきた。

「裏切るならここで死んでもらうよ!! 覚悟しな! ロウイート・アミュレット!!」

俺は瞬時に避けると、この場の対処を考えた。

(フルには攻撃する武器がある。だが俺はそんなものは持っていない。どうやって対処すれば……!!)

“心は顔に出る”とよく言っがどうやらそれは本当のようだ。

「何迷ってるの?? 顔にちゃんと書いてあるよ。」

フルは攻撃を辞めてまた話し始めた。

「もしかして、“逃げる”……なんて考えてるわけじゃないよね? 迷ってるくらいならこっちに来ればいいのに。」

どうやら、俺には逃げるという選択肢はないようだ。

よく考えると、ここで逃げたら姫たちに迷惑がかかるかもしれない。

そう考えるとやはり逃げるわけにはいかなかった。

「おや、迷いが晴れたのか……。態々わざそんなことしなくてもよかったのに。」

(ここで君を倒さなかったら後から大変そうだからね。)

“逃げる”という選択肢を捨てたとしても、俺にはフルに対抗する手段も武器も無い。

そんなことを考えている時でもフルは構わず攻撃してくる。

そんな時、祭壇ルラの方が光った。

俺はそれに気がついたがフルは俺を倒すことに夢中で気が付いていないようだ。

( (あれは!!何でこんなところに!?) )

そこには驚くべきものが置いてあった。

俺はすきを狙ってその光の方へ行った。

( (これはやはり!!見間違えるはずがない!) )

「なんだ、ロート。その石に興味があるのか。だがそれはくれてやらんぞ。」

俺はフルに勝つ手段を思いついた。

それを思い立ったときに思わず笑いがこぼれてしまった。

( (俺は頭の回転だけはまだ良いようだ。) )

「何を笑っている?そんなにその石に興味があるのか。」

( (なあ、フル。きみさ、この石の意味ってちゃんと知ってるよね

?)

俺はわざと問いかけた。

「何を言ってるんだ。もちろん知ってるにきまつてるじゃないか。その意味を知らなかったらそんな石なんていらさないさ。」

(じゃあ、何でここにあるの??)

「えっ……?なんでって、それは……その……あれだよ、あれ。」

フルは動揺していた。俺に問いかけられた時から膝ががくがくしていた。

それに俺はさらに追い打ちをかける。

(ねえ、フル。“あれ”ってなあに??)

「お前……!!」

思わず笑いがこぼれる。

(何でそんな怒った顔してるの?この石の意味を尋ねただけなのに何でそんな怒る必要があるの?)

「お前、調子に乗ってるのも今のうちだぞ!!ここで俺に倒されりゃ終わりなんだよ!!」

俺は冷静に問いかける。

(じゃあ、この石の、秘宝の本当の意味は?)

「本……当の……意味??」

フルは知らなかった。

この秘宝にもう一つの意味があったことを。

(なんだ。本当の意味も知らないでこの秘宝を盗んだんだ。)

「盗んだ」だと?証拠も無いのに勝手な言いがかりをつけるな!

おっと。これには反応した。

(この秘宝って、ウオスレイト王国が戦争起こすきっかけになった秘宝なんだよね。この秘宝が無くなって先ず第一に疑われたのが隣の国の王。あの王は宝石には目がないからな。それが原因で戦争が起こったんだよね。)

俺は涙をこらえながら言った。何故なら、その戦争さえなければ姫とも離れずに済んだからだ。

(それに、フル言ってたよね?“ロスト王国ファインド秘密機関探索科”って。この秘宝の搜索を担当してたのって、フルたちだよな?)

フルは青ざめた顔をして、膝をついた。

まるで、もう全てがばれてしまった殺人犯のように。

「お前は一体何なんだ！？何故その石の存在のことを知っている？王族でもない一般兵士のお前が、何故！？」

（それは国家機密上、教えられないね。言っとくけど、秘宝を盗んだことは“大罪”だからね。）

俺は本当の意味を伝えていなかった。だが、伝えても伝えなくてもきつとフルは神の逆鱗に触れた罰が下るだろう。

だが、最後だから言っておくことにしよう。

（本当の意味を教えるよ、フル。何故、俺がこの秘宝を目にしてここまで話せた理由を。）

そう言っても、放心状態のフルには聞こえていくわからない。

（この秘宝の普通の意味は“癒しの輝石”。人の心を浄化する力を持っている。だが悪用すれば、その力は逆となり“浄化”ではなく“制圧”へと変わる。その“制圧”の状態がお前だ。）

俺はじつとフルを見つめた。

未だ放心状態でかなりこの秘宝を悪用したらしい。

（そして、本当の意味。この秘宝の本当の意味は“真実の証”。この秘宝が見た真実をそのまま教えてくれる。だから俺はここまで話せた。この秘宝が真実を教えてくれた。）

俺が本当の意味を言うと、フルは意識を取り戻したのか、何やら話し始めた。

「はははっつ……。どうやら僕は君に負けたようだ。」

そうフルが言うと、祭壇ルトラの方からすさまじい音がした。

（さ、神々のお目覚めだ。フル、君には覚悟していて貰わないとな。）

「もつとっくの昔に覚悟はできている。」

祭壇ルトラの方を見ると長年の封印が溶け、神が姿を現した。

（恨むなら神や周りの人間じゃなく、大罪を犯した自分を恨むんだな。）

そう言って、俺は秘宝をしっかりと持ちその場を静かに立ち去った。

祭壇を後にする時、フルの悲鳴が聞こえたが、俺は無視して立ち去った。

凱旋山ヘルディオールをおりようとした時、何かに呼び止められた。

『ロウイト・アミュレツタよ。そなたは見事に灰と化した状態で悪事を裁いた。それをたたえ、そなたの願いを3つだけ叶えてやるう。』

俺は迷った。俺自身の願いは沢山ある。

だが、それでは俺にしか良いことは無い。



姫に逢いたい気持ちもある。

どうすればいいかわからなくなった俺は、神に言った。

（直ぐには決められません。決まったらここへきても良いでしょうか。）

『いや、ここへきてはならぬ。ここはもともと人間が来る場所ではないからな。よかろう、決まったらそなたの心でわしを呼べ。さすれば再びそなたの願いをかなえてやろう。』

（お手数掛けて申し訳ありません。）

そついうと、神は消えてしまった。

俺は願いを考えながら、ヘルディオール凱旋山をおりた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6088x/>

---

少年の物語

2011年11月22日01時15分発行